

築上町郷土誌会 文化学習会

狂言

きょうげん

歴史ある古典芸能に見る人間ドラマ



狂言「蚊相撲」の一場面
相撲の場面で、ユーモラスな蚊の精が
舞台狭しと活躍するのが見ものです。

2025. 3. 8 (土)

14時00分～15時30分 * 入場無料

会場 築上町コミュニティセンターソピア
(築上郡築上町大字築城 253-1) * JR 築城駅より徒歩7分

出演 狂言大蔵流八幡大蔵会のみなさん

定員 300人(自由席/先着順)

お申込みは不要です。
お誘いあわせの上、ご来場ください。



能と狂言 — 650年つづく伝統芸能

能と狂言から成る「能楽」はユネスコの世界無形遺産です。

能と狂言は奈良時代、「雅楽(ががく)」などとともに中国大陸から日本に伝わった、「散楽(さんがく)」「(物まねや曲芸・踊り)」が起源といわれます。やがて仏教の芸能的要素の影響を受け、歌や舞は「能」に、滑稽な物まねは「狂言」として芸能形態を確立しました。

能は、歴史上の事件や物語などの文学作品を素材に描かれ、謡(うた)と呼ばれる歌と舞を中心に進行する歌舞劇です。亡霊や鬼、神、女性など多くの主人公は能面を被り、美しく豪華な衣装を身に着けます。

一方、狂言は中世の日常的な出来事を題材にしたものが多く、大半は二人か三人の少人数で演じられるセリフを中心とした劇です。時代設定は中世ですが、描かれているのは現代と変わらない人間の姿です。一定の様式に則った演技で喜怒哀楽を表現しますが、比較的写実性を持つ開放的な演技で、セリフも聞き取りやすいので、初めての人でもすぐに楽しめます。今回の講座では「狂言」を上演させていただきます。当時の世相を風刺する笑いのセリフ劇を存分にお楽しみください。



狂言「雷」の一場面
威張っていた雷が、藪医者(やくいしや)の針(はり)におおげさに痛がるどころが笑いを誘います。

番組(能楽のプログラム)と全体の流れ

- 14:00 開会 (出演者自己紹介)
- 14:10 狂言の歴史と舞台についての説明
狂言「寝音曲」のあらすじ
- 14:30 休憩
- 14:40 狂言「寝音曲」 太郎冠者 中島 清幸
主人 秋吉 英二
後見 藤崎 満子
- 14:50 狂言装束の説明
- 15:00 休憩
- 15:10 型の説明(歩き方 ほか)
- 15:20 質問コーナー
- 15:30 閉会

* 太郎冠者(たろうかじゃ)

中世には譜代の下人という、代々一つの家で使役される奴隷的身分がありました。太郎冠者もその一人です。家族同然に扱われることもあれば、下人として売買されることもありました。

■狂言「寝音曲」あらすじ

主人に呼び出された太郎冠者は、謡を謡えと命じられた。前夜、酔って謡っているところを通りがかりの主人に聞かれているので、とぼけて断るわけにはいかず、かといって一度謡って今後度々やらされては迷惑なので断ろうとする。ところが、主人はどうしても聞き入れてくれない。そこで、自分の謡には悪い癖があって、酒を飲まないと言えないと逃げようとした。すると主人は酒を持ってきて、大盃で三杯、太郎冠者に飲ませる。それでも逃げたい太郎冠者は、今度は女房の膝枕でないと謡えないと言い出し、座ったままでは声が出ないと逃げようとするが、主人は自分の膝を貸すからとまでいう始末。仕方なく主人の膝を枕に謡うと、喜んだ主人は今度は座ったまま謡えと命じるが声が出ない。また膝枕で謡い出した太郎冠者の身体を主人が起こすと、声がかすれ、横にすると良い声で謡う。こうしてごまかしている太郎冠者だが、一杯機嫌で謡ううちに調子に乗って取り違え、果ては立って舞い始め、それに気付いて逃げ出してしまう。